

# 共同声明にみる米中両国の狙い

## 特集・ニクソン訪中を巡って

漆山 いろいろな意味で注目されていたニクソン訪中が終わって、共同声明が出たわけです。これは大ざっぱに言って、ベトナム問題、韓国の問題、日本の問題、それから台湾の問題等を取り上げて

いるわけですが、この文面に即して見る限りは、両国の立場はそんなに変わっていないように見えるんです。今までは意味でお互いに見え合ってきたことを台湾は多少の例外ですが、ほかの面については併記するという形になっておりません。

中嶋 ほぼ予想していたとおりだったと思うんです。とくに中国側の問題点は今までわれわれが「人民日報」の社説や、「新華社」の報道の中で見たことのあることばばかりなんです。つまり予想外のものは何もなくと言えますね。これに対してアメリカ側のほうがその文面にニュアンスの微妙なところがあ

る。何か全体として中国ベースであるというようなことがいわれていますが、逆にむしろアメリカベースではないかという気がしました。

ともかく米中双方は、これによって米中というわくの中ではかなりの歩み寄りが進むであろうし、そのムード、ふんいきの中でかなり接近が進むかもしれないですが、しかし、このコミュニケーションをみますと、世界情勢全般にかかわる問題が多うございまして、その点では、米中双方とも非常にきびしい困難な宿題を背負ってしまったという気がしました。

漆山 台湾の表現は、北京のほうは従来どおり「台湾は中国の一省だ」と、「内政問題である」と、「どの国も干渉する権利はない」ということを言っていますね。一方アメリカの表現は新しい表現で「台湾海峡をはさむ両方すべての中国人が中国は一つであり、台湾は中国の一部であると主張しているから、これには反対しない」、「究極的には米軍を撤収

### ◆ 中嶋 嶺 雄

(東京外国語大学助教授)

### ◆ 漆 山 成 美

(東京新聞論説委員)

する」と。「その間は緊張が減少するにしたがって米軍を縮減していく」、こういうことを言っております。この点北京の言い分は従来から言っていることですが、アメリカのこの言い分はニュアンスがとりよるようになってはどのようにでもとれると感じます。

中嶋 ですから、今回米中会談が行なわれ、これをもって台湾が決着がついたという一部の意見がありました。実はそうじゃなくて今回の米中会談で台湾問題は両者とも非常に時間をかけて長い見通しの中で解決しようということに合意した。そのことの表現がまさにこのコミュニケーションに出てくるという気がするんです。

ですから、ある意味でアメリカも中国側が短期的に武力解放することはあり得ないことを十分読み込むことができた。中国側としてもアメリカの立場をある程度認め、少なくとも短期的には現状を凍結するという点で合意があったような気がするんです。しかし、それはそう

いうふうには言えませんが中国側は従来の主張を繰り返した。もし中国がもっと強い表現をするならば、「米華相互援助条約を廃棄せよ」、俗に言う米華条約廃棄をいいますが、一言も言わなかったという点が注目されるでしょう。

中国の最近の論調見ますと、「在台米軍は撤退せよ」ということは言いますが「米華条約の破棄」はほとんど言っていない。日本に対しては日華平和条約ですね。これは平和条約であって軍事条約ではないにもかかわらず廃棄して出てこいと訴いながら、アメリカについてはこういう主張をしているところが、米中関係と日中関係の違いの問題点として考えていいでしょうね。

漆山 確かにご指摘のとおり米華防衛条約に言及しなかったことは、ある意味でアメリカが台湾にコミットしていることを暗々裏に認めているという解釈ができると思うんです。それは北京のある種の譲歩だと思えるんですが、仮に譲歩とした場合に、結果的には台湾海峡で武力行使をしないことに意見が合致したのではないかという新聞の観測記事がありましたね。案外そういうことが暗々裏にあったのかも知れない。さらに背景を考えると日本とアメリカをなぜ使い分けるのか。つまりそこに北京の政治戦略、日本をにらみ、ソ連をにらんだ戦略があると解釈すべきじゃないかと思うんです。

中嶋 とくにソ連との関係は、このコミニケに特にふれていないところが「みそ」ですが、今回の会談の中でソ連の問題が明示的に語られなかったにせよ両者を結びつけたいちばん大きな要因の一つであることは明らかで、むしろなんらかの形でかなり突っ込んだ討論がなされ、ソ連のアジアにおけるプレゼンスを米中双方意識したのではないかと。とくに中国が意識したのではないかと。台湾問題をあまり短期間で解決しようとして、現在の台湾政権がにっちもさっちもいかなくなるまで追い込むことはむしろ中国にとってもよくない。つまりそこまで追い込むと、場合によってはソ連と手を結ぶかもしれないという不安感もある。そのことが台湾の現状凍結、そして米華防衛条約についてはこれをメンションしないで暗黙のうちで認めたという気がいたします。いずれにしても、この問題を

含めて米中双方が、アジアの国際政治における現状凍結とにかく合意している。アジアにおいては、その覇権を求めて争ってはいけないこととはがいろいろございますね。ところが、今アジアにおいて最も著しい現状打破勢力はソビエトですね。その次が日本である。こういうところが実はこのコミニケの現状凍結、合意と、ある意味では摩擦対立してくるわけで、そこに今後の国際政治の

複雑な問題がからんでくると見ます。  
漆山 アメリカのほうから見ても、な

ぜ米中会談に踏み切ったのかということの中に、欧州の問題、アラブ・イスラエルの問題、SALTの問題、いろいろあったわけですが、アメリカとソ連との間が完全な和解がうまくできないことに、アメリカが苦しんでいたわけですね。しかもベトナム戦争後の戦略でいちばん大きな国家はソ連である。そういう意味で大きな警戒を持っていた。

そういうことから北京の接近も当然あったわけでしょうが、北京のほうから見ても、北は陸軍に囲まれ南は海上勢力としてのソ連を意識せざるを得なくなってきた。それからインド亜大陸がソ連の影響圏にはいって、しかもベトナム戦争でさえあんまり長引くとソ連の影響下にはいるかもしれない。ある種のベトナム戦争の早期打開でさえも北京の腹のうちにあるというふうに見えるんです。

中嶋 従来ベトナムに対して徹底抗戦を言っていたのは、実はソ連でなくて中国であつてどちらかというソ連のほうが和平会談に持ち込みたいふんいきだったんですが、それがどうもここ一年ぐらいいの間で逆転してきました、むしろソ連のほうが最後の詰め段階で北側を軍事的にも援助しておりますね。

北ベトナム解放戦線も、ベトナム和平という先が見えた勝利への展望、成果を米中にさらわれたくないという反発、そのことが、この問題をできるだけパリ会谈の土俵で解決したい衝動にもなるので

しょう。

漆山 この共同声明が米中の現状凍結というような形を旨としている場合、これが北京の将来の対外路線と権力構造とどう結びつくんだろうか。つまり北京の将来変わらざる路線としてこのまま続いていくもんだらうか。

中嶋 短期的に見れば周恩来は、昨年九月といわれた中国共産党内部の、とくに軍を中心とする林彪失脚につながる政変を收拾し押えていると思うんです。劉少奇、鄧小平をやったときは、ともかく表向きは紅衛兵運動から奪権闘争に至る大衆闘争という形をとったんです。ところが今回の林彪および軍の首脳失脚は雍正そのものでしかない。しかも文革の理念がさんざん鼓吹されたあと起こっている。

この後遺症は中国内部に残るし、まだまだ問題は解決されていないと見なければいけない。それだけに周恩来は今回の会談をぜひとも成功にもっていくために、いわば執念のような意気込みでこれにぶつかった。そのことによって林彪以下を失脚させ、周恩来のイニシアティブ、毛沢東の合意をとりつけたながらその路線を定着させようという執念がニクソンを迎えて熱心な米中会談へ臨む態度になつたと思うんです。

この先どうなるかという予測はなかなか困難なんですが、中国の政治的リーダーシップにおける党内闘争は歴史的にず

っと中ソ関係があるわけです。ある意味では、その中ソ対立が中国の国内の政治過程に、いわばビルトインされる要素が非常に強いわけですね。彭徳懐から始まって羅瑞卿、今度は林彪と、いわば軍の第一線に立った人たちは全部それで消えていってわけです。

今回の林彪についても最近の論調を見てもすと、いわば軍官僚対党官僚の対立、とくに林彪の場合は、毛沢東思想にのって九全大会を乗り切り、そうして対ソ徹底抗戦を叫び、社会帝国主義と最後まで戦うだという林彪路線を出したが、六九年の中ソ軍事衝突でソ連が強いんだという認識がおこり、従来林彪路線から脱脚しようとしたんじゃないか。対ソ徹底抗戦は中国の安全保障にとってもあぶないと軍が読んだと思うんです。そのことは、同時に一方で外交路線の転換を始めて平和共存的な対西欧およびアメリカに近づこうとする路線とも対立して、とくにニクソン訪中という中国政治の大転換を契機として、急に出てきたという気がしましてね。そこで毛沢東、周恩来と、林彪とが対立したんだと見ることができるよう気がするんです。

しかも中国は去年の国慶節に共同社説が出ないで、ことしの新年に出ました。ところがその間十二月一日に共同社説が出てるんです。中国の共同社説は記念日に出すのが常識なんですけれども、十二月一日はなんでもない月なんです。この

共同社説は、例の紅旗論文を受け継いで一部の外圍と結びついた野心家、陰謀家を強調している。共同社説がออกมาすと各省がそれにちょうちんを掲げて、党中央に忠誠を誓うことを数日後にやるんです。

ところが今回は、その出が遅くて、まだ全部出てません。その共同社説に忠誠を誓った一部の地方放送なんかを聞きますと外圍に通ずる一部の野心家、陰謀家は骨と肉が散り散りになって、その末路は墓もないような状況になるのが当然のことであるような恐ろしいことばがあるんです。その意味でも、今回の中国の問題は深刻だった。

この半年、一方で米中接近、ニクソン訪中を迎えようとしていながら周恩来は他方で、シリアスな問題をかかえて今回米中会談に臨んだ。このことは北京空港におけるニクソンと初めて握手したときの周恩来の、あのなんとも言えない緊張にあったんじゃないかと思うんです。



▲ 中嶋 嶺 雄 氏

と、アメリカはどんな条約をしてみても将来はわからないじゃないか」というような懐疑的な社説をエコノミストは掲げていたんです。まだ分らない点がたくさんあるんですが、わたくしは、ニクソン訪中後のアメリカのマスコミを見ておりまして感じることはかなり抑制された議論が多いことですね。

ジョージ・ポール氏なんかは行く前に「ニューヨーク・タイムズ」に書いてたのを見ると、アメリカは同盟国を傷つけて北京に行こうとしているという警告を出しておりましたし、それからブレジンスキーがこの共同声明を見て、「まあ行くこと自身は悪くはないけれども外交のプライオリティ、優先順位をまちがえないように」という警告的な論調を書いておられますね。米中よりも日本、欧州のほうがより重要だ。かれは「民主党がそういう外交政策を立てろ」というようなことを主張しておりますね。ライシヤワールさんも、これは声明を見てややホッとしたらしくて、「まあこれでいいだろう」とつてなことを言っておりますね。



▼ 漆山 成 美 氏

全体として、ハリスの世論調査なんか見ると、だいたい七〇%強が「よかつた」という大衆レベルでは意見が強いわけですけれども、識者の間にはかなり慎重な意見が出てる。これをニクソン政権、ないしは今後の政権がどう調整していくかということはまだわからないと思っております。

「ワシントン・ポスト」の社説でも、これはいいのかもしれないのちよつと判断しかねる。例のフルシチョフとケネディが会談したときに、フルシチョフはケネディの意図を読みそこなった。その結果一年後にキューバ危機が起こった。

今度の北京会談でアメリカの意図を北京がどういうふうに読むかということはまだわからない。だから早急な結論を出すことを避けるようではないかというような主張をしておりますね。そこらあたりが穩健な平均的な意見だろうと思うんです。だから、ニクソン大統領は歴史的な成果だと自画自賛しているのは政治家ですから結構ですが、客観的にいって、まだこの成果をどう判断するかということについては、固まった意見はないようですね。

中嶋 今アメリカの内部のお話伺いましたが、中国の内部にもそういう要因があるということになると、そう簡単に、これでもって米中の問題も解決され、国際緊張も緩和することには、いかなくなる。現に国際関係では複雑な、多角的な

要素が出てきて、アジアにおいてかなり緊張をもたらすかもしれない。中ソ対立は従来国際共産主義運動という、いわば社会主義国家内部の問題とされてきたんですが、そのことが今度アジアにおいて、現にインドや、パングラデシュがそうであるように国家レベルにおける国際政治全体に影響してくるような気もいたしますね。

漆山 欧州の協調によるフランス・オプ・パワーで十九世紀は平和を保った。それに対してニクソンがある種のノスタルジーを感じてる面がありますね。現代世界で世界のバランス・オブ・パワーという考え方がとれるかとれないかですね。

中嶋 だからライシヤワールさんが、たとえは今度のことをメッテルニヒ外交、十九世紀的宮廷外交だといいましたが、中国を見ますと遠交近攻とか、そういう非常に古い中国の伝統的な思考様式にのつたものであるように思われますね。しかも、その内部にいろいろ問題があるだけに演出としてははでにやりまます。表面的に見ると今度の米中会談は、国際政治において、そのイメージがこれほど重要な要素になったのは初めてじゃないかと思つたんです。そのことは現象的には非常に新しいような気がするんです。

確かに今度のテレビ宇宙中継は、まさにイメージ政治、それを両首脳とも意識

して演出した。世界の各国で宇宙中継が見られるというのは非常に新しいような気がするが、その本質は何か古くさい。いわば双方の自己顕示欲がありながら国際社会の流動化する多元的な情勢をきめ細かく見るのではなくて、非常に古いものがそこに感じられます。これはそれだけにリスクが大きいと見ていいのではないのでしょうか。

漆山 共同声明には一言も出てないんですが、ソ連が流動的な現象の一つの動きを握っているわけですが、今後どう出るか。モスクワ会談もありたいへん注目される点なんです。この間アメリカの雑誌を読んでみましたらキッシンジャーは二つの悪夢を持っている。一つは中ソ戦争が起こるんじゃないかという悪夢だ。それからもう一つは、中ソが和解するのではないかという悪夢。キッシンジャーとしてみれば、現状がしばらく続くという前提で北京との話し合いをやっているわけでしょうが、ソ連が今後どう出てくるだろうか。これもわからない要因の一つですね。

またアメリカ筋の雑誌の情報ですが、ブレジンスキーの側近の若手の中には米中会談以後、北京とある程度和解すべきだということを進言している者もいるというような情報もあります。ソ連の出口は当面米中の間にどういうくさびを打つかということに当面集中してくると思います。

中嶋 ブレジンスキーはソビエト研究者でもあるし、かれのその政治的なバイアスからしても、そういう進言はある程度わかるんですが、ソ連はブレジネフ・ドクトリンみたいなものを本格的にやり出すチャンスだと見ているのではないのでしょうか。現に北ベトナムとの連携がかなり進んでおり、軍事援助だけじゃなくベトナム労働党の中に人的にもいろんなくさびを打ち込んでいます。

北朝鮮は従来米中会談歓迎のようなふんいきだったんですが、だんだん逆の方向に動いてますね。外務大臣がモスクワに行ってブレジネフ書記長と異例の会談を行なった。それからバングラのラーマンさんがモスクワに行っている。やはりソ連は、時わに利ありと見て今後もこの政策をかなり推し進めるであろう。また、そういう立場だからアジアにおける現状を凍結したいという合意の上で成り立っている米中の醜い結びつきと見るわけです。

米中对ソ連の衝突という形じゃなくて華麗な大国外交の中に取こぼされていく、たとえば北ベトナムとか、バングラとか、北朝鮮、韓国、台湾を含め、そういう諸国をかなり巻き込んでいくと思うんですね。そこに多角的な緊張の要素が出てくる可能性をむしろ見ておかないといけないんじゃないかと思うんです。

漆山 これは日本の国内のことにもひっかかりますが、もうこれで緊張緩和し

たんだという一般的な定説が多いわけですが、実はそうじゃない。非常に多角的な緊張も起こる。それから未知のファクターが多くなってくる。つまり手さぐり状態の国際政局にはいつてくるわけですね。

しかも三種と俗に称するものが、それぞれ一致した強制力を働かし得なくなるわけですから、混乱が起こったときに処理がよりむずかしくなってくる。だから緊張が増大したと言いませんけれども、緊張が緩和したと言いつけることに今の段階では大きな疑問を持っているんです。

中嶋 米中にとってもかなりむずかしいですね。いちばん初めの問題に戻りますが、たとえば日本にとってもかなりむずかしい問題が突きつけられているわけで、日米関係から日中関係へというオー・オア・ナッシングな発想でなびいていくようなことでは、とてもこの流動する国際関係に対処し得ない。もう少しきめ細かく問題を見ていかなければいけないと思うんです。

(三月三日放送)

Vおしらせ

日本短波放送では、本誌のほか毎月「時の話題」「自由の窓」「世界経済ダイヤル・レポート」を発行しております。いずれも、日本短波放送で放送したものの収録です。国内の政治経済は勿論世界各国の情勢を、各方面の第一線の方々にお話しいただいております。どうぞ本誌とあわせてご愛読下さい。なお手続は左記のとおりです。

「時の話題」

一部三十円です。お申込は

東京都港区赤坂一丁目九番十五号

日本短波放送「時の話題」係

「自由の窓」

一年分として送料とも三〇〇円をそ

え、お申込み下さい。

東京都港区赤坂一丁目九番十五号

日本短波放送「自由の窓」係

「世界経済ダイヤル・レポート」

本誌は無料ですが、郵便料が一部につき三五円となっておりますので、一年分四二〇円、半年分二一〇円となります。普通為替又は郵便切手を同封の上お申し込み下さい。

東京都港区赤坂一丁目九番十五号

日本短波放送

「世界経済ダイヤル・レポート」